

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功の



美術の時間
を
楽しむ
のです

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その97 熟すような仕事は可能か

敵へ見透すよひな目

仕事や暮らしに追われていると、同じような日がこの後もずつと続いていくように感じることはありません。しかし何がしかの事件が起こると、そのような日常は直ぐに破られてしまうようです。先日、日本画家の小嶋悠司さんの訃報に接したときも、そのような思いにかられました。

徳島県立近代美術館は、小嶋さんの大作、〈穢土〉（一九八五年）を所蔵しています。横が五メートル、縦が二メートル近い作品です。「穢土」とは仏教用語で、苦しみで満ちた現世、人間の住むこの世を示します。戦争や自然破壊、殺人など繰り返して起る悲劇を「地獄と化した現世曼荼羅」として描いたもので、褐色の画面に世の中を見つめる画家の厳しい視線が感じられます。

京都のお宅で小嶋さんにお目にかかり、いろいろとお話を聞かせていただいたとき、作品と同じように人を見る目にも鋭さや厳しさがあると感じたとを思い出しました。あれこれと言葉にして論評するわけではありませんが、人の世を「現世曼荼羅」として捉える作家の目が、目の前にいる人間の本质も見透しているように感じたのです。

それは学芸員としてちよつ

と緊張する時間でもありません。展覧会の企画や作品収集の仕事があるため、学芸員は作品を評価する側のように思われることがありますが、そのような役割はむしろ無条件に与えられているわけではありませぬ。とくに私よりも前の世代の京都の美術関係者のなかには、その場で交わされる言葉よりもその人が何をしてきたのかを長い目で判断しようとするところがあり、小嶋さんからもそのような視線を感じたのです。

口には出さないにしても、作家は学芸員に対して、「あなたほどのような仕事をしてきたのか」と尋ねたいときがあるといえます。ある作家の昔話なのですが、展覧会歴や所蔵作品のある美術館を作家が公表するように、学芸員や評論家も「これまでやってきた仕事を公にすべき」と語ったことがあったそうです。反応がほとんどないなか、今年一月に亡くなった南郷宏さんだけが、若い頃、自分の書いた文献など、業績を整理して送ってくれたそうです。南郷さんは、熊本市現代美術館館長や女子美術大学教授を歴任。享年五十八歳。生真面目なところがあつた人なのでしょう。その作家さんは京都の人ではないので直接的なもの言いがあつたのかもしれませんが、ですが、そのような人が行つて

きたことを、京都の美術関係者はどこかじつと見ている感覚があつたと思うのです。人を簡単には評価せず本物になるまで見守ろうとする雰囲気です。多少の業績では褒められませぬので、後輩としては厳しく感じることもあるのですが、その人が何をしているのか静かに見ている。歴史に評価の基準を置いていくからなのでしょうが、ひとときの評判などはさらっと流してしまふ。そのような厳しさと優しさがあつたと感じる場面に何度か出くわしたことがあるのです。

毎日このようなことを考えているわけはありませんが、訃報に接し、小嶋さんの視線に同じようなものがあつたのを思い出させていただいたのです。小嶋悠司さんは一九四四年生まれ。創画会を中心にして活躍。京都市立芸術大学教授として後進の指導にも力をつくしました。七十二歳でした。

敵へ優しく見透すよひな目

京都の美術関係者の思い出をもう少し書かせていただこうと思います。三十年近く前、京都国立近代美術館で三ヶ月間、研修を受けたときのことです。

私はまだ二十代であり、研究員（当時は研究官）の皆さんのことは雲の上の存在として

で見上げるばかりでした。それだけでなく美術評論家の河北倫明さんのように歴史的と考える人物、著名人がひよつこりと訪れる環境にあり、毎日が非日常の連続のように思われたものでした。

研究員の方々はあまりにも忙しいため、研修といつても学校の授業のように時間をとって指導してもらうことはできず、業務を遠くで見学させていただく時間の他は、所蔵作品の写真の整理を行っていました。ポスターやチラシ、図録の図版を印刷するときに使う高画質の写真（ポジフィルム）を、ビニールケースに入れ、作品番号、作家名、作品名等のデータを手書きで書き込んでいくのです。写真は千点ほどありましたので簡単に終わる仕事ではありません。そのときの研修生は私一人で、一日の間に誰かと言葉をかわす時間もほとんどなく、ただもくもくと作業を続けていました。

その仕事をする机を、簡単な打ち合わせや来客対応ができる大きなテーブルの近くに置いていただいたのは、いまから思うと若い研修生への配慮だったように思えます。来館する人と接する職員みなさんの姿に触れることができたからです。

とても感心し印象に残っているのは、研究員の方々はどん



広島晃甫 秋甫(「暮らしの感覚」展 出品作品)



「阿波の道を歩く」展チラシ

「阿波の道を歩く」展チラシ
どこかで維持していかなければなりません。「熟すような仕

なに忙しくても午後三時になると、その白く広い丸みのあるテーブルに集まり、お茶を飲む時間をつくっていたことです。そこで、いろいろな情報交換をする他、送られてきた図録や資料を見て意見を交わし、細かな仕事を効率よく処理する時間にしていました。私はみなさんの間で小さくなって、コーヒーカップを口に運ぶだけでした。ですが、京都の美術関係者は人が行っていることを「どこかじっと見ている」という感覚は、そのお茶の時間に得たものが大きかったように思います。ある年配の洋画家について、「なかなか認められませんな」という話題が出たので、恐る恐る質問すると、地道に制作してきた生き方、作品のよさをみなさんが高く評価しているようすが感じられました。一方で、言葉が先行する人に対する厳しい意見を知ったこともありました。そこで話され

ていたのは、当時の私にとって、行間を読まないで分らないくらい簡潔で間接的な京都の言葉ではあったのですが。研修が終わりに近づいた頃に送別会を開いてもらいました。会場まで歩いていくとき、学芸課長の内山武夫さん(後の館長、二〇一四年没)に、「お忙しいのに時々は飲みみ出られるのですか？」と尋ねました。「海外に出張するより祇園に来る方が少ないわ」とのこと。逆に「何で来たか分かるか？」と聞かれ、しばらく黙っていると、「あんたが地味な仕事をしたからや」と話してくれました。私としては居場所がなく緊張続きの毎日だったのですが、仕事を見ていてくれたのだと思えました。

京都国立近代美術館の新館がオープンしてまだ一年半ほどの頃です。開館記念展「京都の日本画(1910〜1930)」展(一九八六年)は、大正期の国画創作協会の画家など、時代の变化のなかで忘れられていた人たちに照明を当てた展覧会で、後々まで大きな影響を与えました。内山さんや島田康寛さん(現神戸市立小磯記念美術館館長)ら当時の学芸スタッフの方々、引き続き埋もれた作家の研究と顕彰に取り組んでいました。報われない努力を続け業績を残した画家たちも、日の当たらないところで働く人たちも、同じような厳しく優しい目で見ていたのだと思います。

先人の姿を思い起す

つい昔話を書いてしまいましたが二十一世紀の今日、以前よりもじつくりと仕事を深められる環境が弱まっているのは間違いありません。どの分野でも仕事にスピード感が求められ、業績のアピールが生き抜く力のように捉えられがちではないでしょうか。しかし情報が日々消費され、心に残る感動がそう簡単には得られない時代だからこそ、文化芸術の分野では、「歴史に評価の基準を置いて、本物になるまでじつと見守る雰囲気」を、社会的どこかで維持していかなければなりません。「熟すような仕

特別展と連携展示

事は可能か」。そのためにも、ときには目先のことから離れ、先人の姿を思い返してみたいものです。

今月はじまる特別展「暮らしの感覚」では、デザインを専門とする竹内利夫上席学芸員が長年あためてきた問題意識が形になります。展覧会場には、第一線の家具デザイナーによる椅子が用意されますので、お気に入りの椅子に座ってゆっくり作品を鑑賞することができそうです。畳敷きのコーナー、特別な机のあるコーナーもある展示室では、今までにない新しい作品との出会いが得られるかもしれません。

る空間

- 16日「土」から
- ・オープニング交流アクティビティ「心のいるをうちあけて」16日「土」14〜16時 鑑賞とやさしい創作体験 ※要申込、磁気ループと要約筆記あり
- ・ウエルカムツアー(学芸員によるみどころ案内) 17日「日」、24日「日」14〜15時
- ・デザインナートーク(小泉誠氏) 23日「土」14〜15時30分
- ・教員のための夕飯前研修 29日「金」16時〜 要申込(教員対象)
- ・ベビーカーアワー(鑑賞ツアー) 30日「土」11時〜
- ・託児つきパパママアワー(鑑賞ツアー) 31日「日」11時〜 要申込

所蔵作品展 2016年度 第I期

- 3日「日」まで
- ・子ども鑑賞クラブ カメラでアートの巻 2日「土」14時〜 小学生(保護者同伴可)

所蔵作品展 2016年度 第II期「特集1 立つこと、座すこと、歩むこと」

- 7月9日「土」から
- 連携展示「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男 酒井弥蔵 X 現代アーティスト 大久保英治展」
- 20日「水」から 会場・文化の森各館
- ・プレワークショップ 美術家・大久保英治と「石」をたてる
- 18日「月・祝」9時30分〜 要申込

7月の催し

■特別展「暮らしの感覚」アートと人とデザインが交流する空間